

若菜摘

長唄

全詞章

変化舞踊「花兄弟十二月所作」の一

〔本調子〕 君に若菜をすすむること、寛平延喜の御代に始り、天曆四年如月にも、
女御安子のたてまつる、なななに数そふ十二種の、色くらぶなる若菜人

いく千代も変らぬためし妹と背の、睦みなづみて春日野の、若紫の恋衣、しのぶの乱れ
限りなく、深き思ひを筒井筒

うつり心と始めから、うき水茎の筆目花、心根芹にたちあかし、待つに甲斐なき偽りの、いつ
逢ふ人のよすがさへ

薺うらみて片山雉子、鳴く音にもゆる早蕨の、露に綻ぶ風情なり

花の粉染の色わけて、紅梅殿や老松の、緑の空に誓ひして、契り情のひと夜松

薄雪消えて如月に、たちわたり舞ふ雲の袖

和光の影も曇りなき、春日松尾の二つ神、分身威明の姿を現はし、供御をなへて其のまま、
神はあがらせ玉ひけり